

喜びをもたらすクリスマス

以前、東京のニコライ堂を訪ねた際、妻から「小さい頃、父に連れられて行った新橋駅前の甘味処で、お運びさんが『ニコライの鐘が鳴る鳴る御茶ノ水』と、川柳を詠みながらお茶を運んできた」という話を聞いた。「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の鐘は、ゴーンという侘びの音だが、キリスト教会の鐘はカランコロンと高らかに鳴り響く。鳴る鳴るという繰り返しは、そんな違いを現わしているのではないか。

日本でも馴染み深い「メリー・クリスマス」という言葉の「メリー(merry)」は、もともと「短い」という意味だったと、ものの本にある。「過ごす時間を短く感じる」のは楽しい時に違いないということから、転じて、「楽しい」、「愉快な」という意味に発展したようである。では、クリスマスは何故「メリー」なのか。それはひとりの赤ん坊の誕生という普通の出来事ではあるが、救い主イエスは私たちに無条件に与えられた、とてつもない贈り物であった。努力して、自分の力で獲得するものも大切だが、誰かから贈り物として与えられたものは、何よりも尊いのだ。

4世紀に小アジアのミユラにいたニコライ(ニコラウス)と名乗る司教が、ク

リスマスの前夜、子どもたちに贈り物を配ったという伝説が、いつ頃できたかは知られていない。そもそも、ニコライ自身が伝説的な存在で、奇跡を行う人として広く拝められていた。子供たちに贈り物を配ったという伝説は、彼が三人の貧しい女性に、嫁入り道具を密かに提供したという言い伝えの一般化であろう。さし絵や描写なども様々あるが、表紙に三つの金塊が描かれている聖書を手にするニコライが一番多い。この金塊で、彼はその三人の嫁入り道具を買ったからである。

聖ニコライはなぜか、ドイツの商人の守護聖人にもなり、ニコライに捧げられた教会の数は、ドイツだけで130にも上る。

プレゼントを届けることが、この聖ニコライの名を受け継いだサンタクロースの勤めになった。北極に住んでいると言われるサンタクロースだが、近年日本でも忙しく働いているようだ。子供たちに贈り物の喜びを分かち与えるために。

ちなみに、御茶ノ水のニコライ堂は、1861年(文久元年)に来日した、ロシア正教会のニコライ神父の名に由来する。喜びは世界共通の感情で、それを分かち合おうというのが、高らかにカランコロンと鳴る教会の鐘のメッセージなのである。

Andreas
Rusterholz

関西学院大学
文学部准教授・宣教師

アンドレアス・ルスターホルツ
1964年スイス生まれ。デュ
ーリング大学文学部日本語学
科に学び、在学中に文部省奨
学金を得て広島大学へ留学。
デューリング大学神学部卒業。
大学助手・教会牧師を経て、
2004年より関西学院大
学で教鞭を取る。訳書「山上
の説教―その歴史の意味と
今日的解釈」(H. ヴェーダー
著(日本キリスト教団出版局)
など。



関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

西宮上ヶ原キャンパス

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号

●神学部●文学部●社会学部●法学部●経済学部●商学部●人間福祉学部●教育学部(2009年4月 西宮校地に開設予定)

神戸三田キャンパス(KSC)

〒669-1337 兵庫県三田市学園2丁目1番地

●総合政策学部●理工学部